城西大学スポーツ

2012年 11月 第8号 秋季号

JOSAI UNIVERSITY JU

城西大学の題字は創立者・水田三喜男先生

発行所：〒350-0295　埼玉県坂戸市けやき台 1-1　城西大学

記者募集

記事を書いてみませんか。初心者でも大丈夫です。新聞記者経験がある職員が取材・書き方を基本から指導します。留学生も「学生記者」として活躍しています。興味がある学生、やる気がある学生、大歓迎です。写真、イラスト、漫画などでも協力してくれる学生もぜひ参加してください。

連絡はこちらまで ▶ josaisports@josai.ac.jp

陸上競技　全日本インカレ

四百メートルリレー 快挙!!準優勝

チームの力見せた ノスポ

城西大学は、国立競技場で行われた日本学生陸上競技対校選手権大会（全日本インカレ）で本塩遼（経営4）が二百㍍を制した。他の種目では、本塩率いる四百㍍リレーが大躍進の準優勝、一万㍍で村山紘太（経営2）が4位、八百㍍では平塚祐介（経営1）が1年生ながら5位と健闘した。千五百㍍での松田司（経営2）は9位。そして優勝が期待された三千㍍障害では昨年この種目を制している山口浩勢（経営3）は欠場、と悔いが残った。

女子は五千㍍で橋本奈海（経営3）が出場した城西女子で最高順位の14位だったが、入賞は逃した。

二百㍍ 本塩 悲願のV

本塩がついに専門種目の二百㍍で全日本インカレの頂点に立った。スタートをきった本塩は得意のコーナーで一気に周りを突き放すとそのまま粘り、学生日本一を決めた。二百㍍にこだわったわけを聞くと「二百㍍は勝ちたい種目であり、思い入れのある種目。過去のけがばかりの自分と決別するために全カレは二百㍍で優勝、と決めていた」と話している。

（4面にインタビュー）

リレー 城西新記録で 表彰台

四百㍍リレーの4人のメンバーが城西新記録で（39秒22）準優勝という快挙を成し遂げた。これまでなかなか上位に食い込めなかったリレー種目だが「チームの力です」と語るリレーメンバーたちの姿が表彰台にあった。第一走者の佐藤友弥（経営3）が強豪校に食らいついていくと続く本間圭祐（経営2）が格上と見られた他校ランナーに引けを取らない走りを見せた。

「この結果が新しい歴史の礎になれば」と語る第三走者の本塩が圧巻の走りを見せ一気に優勝争いへ、エースの仕事を見事に果たした。アンカーの野川大地（経営3）は力走したが、わずか100分の3秒で優勝を逃し悔し涙を呑む結果となった。

「準優勝は光栄だがあと一歩で優勝を逃したと考えると悔しい」と語る佐藤。全日本インカレで準優勝という素晴らしい結果で終わってもそう語るメンバーたちが城西大学に新たな歴史を作るのはそう遠くないことなのかもしれない。

◀八百㍍で5位と健闘した平塚祐介（右）

▲一万㍍で４位の村山紘太

（写真はいずれも月刊陸上競技提供）

1年生も 底力で入賞

1年生ながら堂々としたレースをしていたのは八百㍍に出場した平塚だ。「入賞はいい経験になった」と語る平塚は自慢のスプリント力を活かし、格上の相手にも果敢に得意のラスト勝負を挑んでいく。これからが期待される走りを見せた。

「全カレの結果は想定内」と語るのは駅伝部主将・山口。疲労がありコンディショニングが難しかったという。期待された三千㍍障害には出場をしなかったが「箱根駅伝までのことを考えれば良い練習」とチームを考えている主将なりの考えがあるようだ。【萩原洋輝】

2部秋季リーグ優勝 硬式野球部

首都大学野球の1部復帰を目指す城西大学硬式野球部は、2部秋季リーグで、7勝1敗と圧勝でAリーグ優勝を果たした。1部リーグ昇格へのチャレンジ権をめぐる入れ替え校決定戦の相手は桜美林大学で、10月13～15日に行われた。城西は、初戦で3対4の接戦で敗れた。しかし、その後は奮起し、3対2、5対2と連勝した。

「城西魂」が発揮されたのは、2回戦だ。もうあとがない。城西大は、1回表に先制の1点をあげたが、桜美林大は2回裏、連続二塁打と城西の失策をからめ逆転。7回表、城西大は4連続四球により再び同点となる。そして延長戦。10回表、城西大・村田が安打で出塁すると続く打者は四球を選び、一、二塁とする。更に犠打で好機を広げると代打の関洋が犠飛を放ち逆転した。見事な粘り腰の勝利だった。

1部との入れ替え戦のプレーボールは10月27日。【原駿介】

秋季2部Aグループの結果

大学名	足工大	東経大	獨協大	城西大	創造大	試合	勝	負	分	勝率	順位
足工大	―――	●0－5 ○4x－3	○6－0 ●1－2	●0－4 ●2－12	○8－2 ●1－3	8	3	5	0	0.375	4
東経大	○5－0 ●3－4x	―――	●1－2 ○2x－1	●2－4 ●1－2	○9－3 ○4－0	8	4	4	0	0.5	2
獨協大	●0－6 ○2－1	○2－1 ●1－2x	―――	●2－3 ●1－3	○2－1 ○11－0	8	4	4	0	0.5	2
城西大	○4－0 ○12－2	○4－2 ○2－1	○3－2 ○3－1	―――	○2－1 ●2－5	8	7	1	0	0.875	優勝
創造大	●2－8 ○3－1	●3－9 ●0－4	●1－2 ●0－11	●1－2 ○5－2	―――	8	2	6	0	0.25	5

関東総合6位 2連覇逃す

女子駅伝部

第18回関東大学女子駅伝対校選手権大会が9月30日、千葉県印西市で行われた。城西大学は、2連覇を逃し、総合6位だった。昨年の全日本でシード権を獲得しているので、10月28日の全日本大学女子駅伝（宮城県仙台市）の出場はすでに決めている。

1区、橋本奈海は今回初めての1区を任され、流れをつくるフレッシャーがある中、混戦の1区を1位でタスキを繋いだ。秒差で区間賞を獲得し、全日本に繋がる走りを見せた。続く2区・3区は、距離が他の区間に比べて短いため、スピードがある選手が集う。

2区を福崎奈々が、3区を脇田玲加がそれぞれ走ったが、筑波大学と天東文化大学に追い抜かれてしまった。4区は、昨年の全日本1区で安定した走りを見せた、片貝洋美。エース起用で逆転を狙ったが、筑波大学のルーキーで中学・高校と激戦区の京都で活躍していた、久馬双子姉妹の一人、久馬朋が立ちはだかり、追いつくことができなかった。5区主将の後藤百絵も、「負の流れ」で順位を押し上げられず、今大会最長区間である、6区アンカーを務める谷町衣里奈も、関東インカレ五千㍍・一万㍍で上位入賞している、中央大学の篠塚麻衣に追いつかれ、総合6位でゴールした。

全日本駅伝を経験した選手を多く起用したが、夏合宿・インカレの疲労が抜けきらなかったのか、巻き返すことができず、総合順位6位でのゴールとなってしまった今大会。試合後、1区を務めた橋本奈海と現主将の後藤百絵に話を伺った。

全日本で結果を

橋本は、「初めての1区でとても緊張した。自分がいい流れをつくり、後の区間の人たちに繋げたいと強い気持ちで走った。結果は6位で、私がもっと2位との差を開いておければ、と課題の残る レースだった。本番の全日本駅伝ではみんなで気を引き締めて練習していきたい」と、全日本駅伝までの、残りの期間を大切にしていく姿勢をみせた。

主将の後藤は、「関東駅伝は思い描いているような結果ではなかったが、この悔しさをバネに全日本駅伝では目標にしている3位に入賞できるように、チーム一丸となって感謝の気持ちを忘れずに頑張りたい」と、3年生で主将がからしっかりと今後のチームを考え、そしてまとめていく、強い気持ちで、話していた。

全日本大学女子駅伝では、大学全体で応援し盛上げていきたい。【篠優紀】

■記録
1区 4.6㌔。
橋本奈海（経営3）14分55秒 区間1位 区間賞
2区 4.5㌔。
福崎奈々（経営2）14分43秒 区間6位
3区 3.3㌔。
脇田玲加（経営3）10分51秒 区間5位
4区 5.8㌔。
片貝洋美（医療栄養3）19分14秒 区間3位
5区 4.6㌔。
後藤百絵（経営3）15分23秒 区間3位
6区 7.8㌔。
谷町衣里奈（経営3）26分39秒 区間8位

アンカーを務めた谷町衣里奈

少数精鋭 全日本出場への道

弓道部

男女共に一部リーグに所属している城西大学弓道部。昨年に続き、伊勢神宮で行われる全日本学生弓道王座決定戦（11月）に出場できるのか注目されている。その条件としてまずは、秋季リーグ戦、その後の関東各ブロックとの決勝大会を勝ち上がってきている」と国際武道大戦へポジティブな意気込み。女子は、1部リーグへ昇格して初の大会である。初戦の大東文化大に勝利して勢いづいたものの、練習試合ではたまたま勝てた埼玉大戦では1本差で負けてしまうが、その後の文教大には勝利。

試合の方式は、男子が4人2チームで8人が計160本を、女子は3人1チームで計60本を打ち、両方とも、的への的中数が多かった方が勝ちとなる。

特に女子は、部員が4人しかいないため、ほとんど替えがきかないという状況。片倉裕貴（4年）は「このギリギリの状況は、少数精鋭で頑張っている。チームで一丸となって、練習試合では勝てるように、チーム一丸となって頑張ったい」と、3年生で主将がからしっかりと今後のチームを考え、そしてまとめていく、強い気持ちで、話していた。

全日本大学女子駅伝では、大学全体で応援し盛上げていきたい。【久村洋介】

出雲駅伝 総合9位「意識高めたい」

男子駅伝部

10月8日に行われた第24回出雲全日本大学選抜競走大会（出雲駅伝・出雲大社～出雲ドーム）に男子駅伝部が出場した。今年は昨年と比べ風が強い中のレースとなった。

1区は村山紘太（経営2）。9位とやや出遅れたが、2区中原大（経営4）が区間3位の力走をし、二つ順位を上げチームを7位に浮上させた。3区山口浩勢（経営3）は集団から抜け出し6位に上げると、出雲市出身の4区石橋佑一（経営4）も安定した走りで6位をキープ。5区山本雄大（経営1）で少し順位を落としたものの唯一の1年生としてしっかりタスキを繋いだ。6区アンカーは平田啓介（経営3）。粘りの走りを見せ チームは総合9位でゴールした。

今回の目標は「上位校と肩を並べて走ること」。

キャプテン山口はレースを終えて「流れが大事な駅伝というものができなかった。また、出遅れを挽回する選手もいなかったことが反省点。今後 を高めたい」と話した。

チームは一人一人の意識 【伊藤香澄、中里絵美】

■記録
1区 8.0㌔。
村山紘太 23分53秒 9位
2区 5.8㌔。
中原 大 17分06秒 3位
3区 7.9㌔。
山口浩勢 24分14秒 7位
4区 6.2㌔。
石橋佑一 18分11秒 7位
5区 6.4㌔。
山本雄大 19分07秒 12位
6区 10.2㌔。
平田啓介 31分04秒 9位
■成績
9位 2時間13分35秒

箱根へ向けて 接戦どう戦う

男子駅伝部は、今年行われた第88回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝・大手町～芦ノ湖）で総合6位に入り、シード権を獲得、来年1月2・3日に行われる同大会の出場（10年連続10回目）が決定している。

学生3大駅伝の一つである出雲駅伝（10月8日）では、優勝候補の駒澤大・東洋大・早稲田大が1区で出遅れ、序盤から地面と垂直になるまで膝を伸ばさなければならない。曲がると反則になる。見た目以上に厳しく、体力消耗の激しいスポーツだ。

初めて五輪種目となったのは、1908年第4回ロンドン大会。現在、男子20㌔・男子50㌔・女子20㌔が五輪の競技種目に登録されている。

今年のロンドン五輪では、男子20㌔競歩は世界記録保持者のカナイキン（ロシア）の失格、北京五輪王者ボルチン（ロシア）の棄権といった波乱の展開で、レースを制したのは陳定（中国）。五輪での大殊勲。銅メダルも王鎮（中国）が獲得し、中国勢の成長が目に見えるレースとなった。一方銀メダルを獲得したパロンド（グアテマラ）は五輪全競技において母国に初のメダルをもたらした。

女子20㌔競歩は08年北京五輪、07年・09年・11年世界選手権の覇者、カニスキナ（ロシア）の2連覇は確実と思われていた。レースもスタート直後から先頭に立ったカニスキナは開半10㌔で、ライバルたちを大きく離して後半10㌔に臨んだ。折り返し地点で43秒の差をつけられていたラシュマワ（ロシア）が猛追撃、ラスト150㍍で逆転を果たした。世界新だった。男子50㌔競歩は7位までが3時間40分を切る超高速レースとなり、キルデャチキン（ロシア）が五輪新で圧勝した。

城西大学の陸上競技部に過去に日本学生個人女子一万㍍競歩を制した大重梨沙（現代卒）のほか、剛田志穂（経営2）ら6人の現役競歩の選手がいる。活躍を期待したい。普段、見慣れていないスポーツにも目を向ければ新たな発見がある。視野を広くしてスポーツを楽しもう！（月刊陸上競技などを参考）【金子亮】

なるほど豆知識
「競歩」って？

「可愛いアヒルのようにお尻を振り振り歩く」――初めて競歩を見た人は、こんな印象を受けるかもしれない。しかし、競歩の歴は古く、特に発祥の地といわれるヨーロッパでは、人気がある競技種目である。いろいろな部があるが、文部・資料などにおいて、①一流代の軍事訓練などが娯楽競技に発展②18世紀ごろ、英国の貴族の散歩が競技となった――が起源といわれている。

「お尻を振り振り歩くのは、次の「歩き方の規則」があるからだ。常にどちらかの足が地面に接していることが求められる。両方の足が地面から離れると反則。前脚は接地の瞬間から地面と垂直になるまで膝を伸ばさなければならない。曲がると反則になる。見た目以上に厳しく、体力消耗の激しいスポーツだ。

初めて五輪種目となったのは、1908年第4回ロンドン大会。現在、男子20㌔・男子50㌔・女子20㌔が五輪の競技種目に登録されている。

今年のロンドン五輪では、男子20㌔競歩は世界記録保持者のカナイキン（ロシア）の失格、北京五輪王者ボルチン（ロシア）の棄権といった波乱の展開で、レースを制したのは陳定（中国）。五輪での大殊勲。銅メダルも王鎮（中国）が獲得し、中国勢の成長が目に見えるレースとなった。一方銀メダルを獲得したパロンド（グアテマラ）は五輪全競技において母国に初のメダルをもたらした。

女子20㌔競歩は08年北京五輪、07年・09年・11年世界選手権の覇者、カニスキナ（ロシア）の2連覇は確実と思われていた。レースもスタート直後から先頭に立ったカニスキナは開半10㌔で、ライバルたちを大きく離して後半10㌔に臨んだ。折り返し地点で43秒の差をつけられていたラシュマワ（ロシア）が猛追撃、ラスト150㍍で逆転を果たした。世界新だった。男子50㌔競歩は7位までが3時間40分を切る超高速レースとなり、キルデャチキン（ロシア）が五輪新で圧勝した。

城西大学の陸上競技部に過去に日本学生個人女子一万㍍競歩を制した大重梨沙（現代卒）のほか、剛田志穂（経営2）ら6人の現役競歩の選手がいる。活躍を期待したい。普段、見慣れていないスポーツにも目を向ければ新たな発見がある。視野を広くしてスポーツを楽しもう！（月刊陸上競技などを参考）【金子亮】

スポーツ特番

プロキックボクサー 学業と猛練習 トップ目指す

「スポーツの城西」には、多彩な学生がいる。格闘技の「花」といえるキックボクシング界で活躍している選手が3人もいるのだ。それも好成績。学業の合間に、節制と猛練習を繰り返し、リングの中で飛びはね、動き、パンチを繰り出す。若さ、エネルギーの爆発――。その3人に女性記者がインタビューした。

右庄子高広（左）
左上小寺耕平
左下石原將伍

小寺耕平（経営4）
埼玉県出身、私立栄善高校
フェザー級（57・15㎏）
実績 5戦4勝1分

庄子高広（経済4）
宮城県出身、仙台商業高校
バンダム級（53・25㎏）
実績 2戦2勝

石原將伍（現政1）
埼玉県出身、鶴ヶ島清風高校
フェザー級（57・15㎏）
実績 7戦6勝1分

――まず、キックボクシングを始めたきっかけは。

小寺 幼稚園では空手、中学、高校時代は陸上競技（幅、三段跳び）をやっていたが、また格闘技がやりたいと思い大学から始めた。

庄子 高校時代は何もしておらず、何かやってみようと思い始めた。

石原 小学校時代から空手や野球をしていて、その後は空手の影響でキックボクシングを始めた。

――キックボクシングをやっていて辛いことは。

小寺 ほぼ毎日練習があるため、なかなか自由な時間が取れず、試合の1カ月前からはお酒も飲めない。

庄子 けがに悩まされ、なかなか試合に出ることができない。

石原 練習での疲労やけがで親に心配をかけてしまう。

――やりがいを感じることは。

小寺 勝ってリングから客席に戻ったとき、友達が笑顔になって喜んでくれたとき。

庄子、石原 勝ったとき友達に祝福されたときや練習後の達成感がいい。

――練習や試合から離れたときの自分、また オフの日の過ごし方は。

小寺 友達に試合は全然違うと言われる。オフの日は温泉や接骨院に行って体を休めている。

庄子 普段と変わらず平常心で、オフの日はお酒を飲みに行ったり、DVDを鑑賞する。

石原 リラックスしていて、友達と過ごすことが多い。

――今後の抱負を教えてください。

小寺 やっているからには自分の団体であるニュージャパンでトップを狙いたい。

庄子 次の試合が近いので1日でも早くけがを治して頑張りたい。

石原 自分の団体の新日本でチャンピオンになりたい。

――これからもご活躍を期待します。

【聞き手・伊藤香澄、中里絵美】

出雲駅伝で力走する6区の平田啓介

全日本 無念の初戦敗退

女子ソフトボール部

第47回全日本大学女子ソフトボール選手権大会が9月1日（土）に開催され、1回戦城西大学は、関西の強豪大学の一つ、大阪大谷大学と対戦し、1対2で敗れ、初戦敗退となった。

試合開始から、両大学とも、打線が繋がらず、均衡を保っていたが、3回裏で大阪大谷大学がヒットを繋げ、2点先制したことにより、流れが一気に相手チームに持っていかれた。城西大学も、持ち味の粘る攻撃で攻めていったが、大阪大谷大学の守備に妨げられ、なかなか後続が続かず、本来の力を出し切れないでいた。

しかし、「全日本」という大舞台で、このままで終わる城西女子ソフトボール部ではない。6回表、長打で1点を取り返すことに成功。最後まで諦めない姿勢が、この点に繋がったと言えるだろう。その後も逆転を狙い回裏に攻撃を仕掛けたが、抑えられてしまい、初戦敗退となってしまった。「全日本」の舞台に立つまでに、山梨学院大学や東京女子体育大学といった関東強豪校と戦ってきた城西大学の強さは本物であるといえよう。

この試合で4年生は引退となる。約1年間チームを引っ張ってきた主将の高橋裕未（経営4）にこれまでについて語ってもらった。

「今年の夏は昨年以上に、遠征での練習試合、合宿と気合を入れて取り組んできたが、その成果を出す、『全日本』で私たち本来の積極的なプレーをすることができなかった。やはりとても悔しい。ただ、冬季練習から関東インカレとみんなで支え合うだけでなく、各ポジション同士で切磋琢磨して、技術を上げてきたことは、チーム力の底上げになり、確実に前よりは力がついたと思う。結果は負けてしまったが、これまでやってきたことは決して無駄にはならないと信じているので、後輩たちも諦めずにまた冬季練習に取り組んでいってほしい」【篠優紀】

■試合結果
1回戦
大阪大谷大学 2－1 城西大学

女子ソフト部の寮完成 実家が遠い学生も快適に

7月に女子ソフトボール部の寮が完成した。寮のある一本松は、スーパーマーケット、ドラッグストア、ファミリーレストランなどが一通りあるエリアに位置する。生活に便利な環境だ。着工から入寮までは3カ月。基本的に普通のアパートと同じ造りで、一棟四世帯が暮らせる部屋のサイズは2DKで、現在1～4年生6人が生活している。建設にあたり、「一人一つのクローゼット・リビングを含めた全ての部屋に室内物干し竿の設置、家財道具の設置を要望した。出来栄えについては長澤監督はじめ部員一同大変満足している。

寮を建設するきっかけについて監督は、「実家が遠く大学に通えない高校生に入学・入部を勧めながら、一人暮らしをさせることが責任者として心苦しかったからだ」と話す。実家が遠く通えない子を勧誘するにはどうすればよいか悩んでいた時に陸上競技部の土江監督から寮についての話を聞き、4年目に実を結んだ。

寮が完成したことによるメリットは多い。長澤監督は、「一つ目は、保護者の方々が安心してソフトボールをするために大学に送り出せる。二つ目は、高校側からも見ても、寮があることで徹底した管理、きめ細かい指導に期待が出来、信頼を持って預けてもらえる。三つ目は、大学に近いことで時間を効率よく使え、普段の生活から先輩・後輩で情報の共有というコミュニケーションが取れる」という。

寮が完成し、益々練習に精が出る女子ソフトボール部に期待したい。【金子亮】

健康相談
保健センターから

学生「メタボ」

食生活を見直して改善

清光会館の1階にある保健センター。看護師の小西くに子さん、花島睦子さんらが学生らの「健康」について目を光らせている。小西さんは、保健センターに十数年間も勤務しているベテランだ。

「大学受験のストレスか、最近、メタボ気味の新入生が目立つようになった。このままでは生活習慣病の予備軍になってしまう」と心配する。

「メタボ」とは「メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）」のことだ。内臓脂肪型肥満を共通の要因として高血糖、脂質異常、高血圧が引き起こされる状態で、それぞれが重複した場合は命にかかわる病気を招くこともある。ただし、食べ過ぎや運動不足などの積み重ねが原因となって起こるため、生活習慣の改善によって、予防・改善できる（厚生労働省）。

小西さんによると、今年入学した1年生のうち約40人に、そうした傾向が見られた、という。なかには、最高血圧が160、最低血圧が90の学生がいた。「ほとんどが男子で、食生活を調べると、揚げ物、肉類やコーラなどの清涼飲料水の取りすぎの傾向がある」と指摘しながら「1日の摂取カロリーを2000～2200㌔㎉に抑えるよう指導しています」と話す。

1年生も入学してから半年以上が経つ。メタボから改善しつつある学生も見られるというが、非メタボ学生を含めて、小西さんらからのアドバイス。

「朝食を必ず食べることはもちろん。昼食も丼物だけではなく、いろいろな食材が入ったものも摂ることが大事」

Letter from Riverside

1 アメリカの大学スポーツ

経営学部助教 山口理恵子

引退後を見据えたプログラム

今、アメリカはカレッジフットボールシーズンの真っ盛りだ。アメリカ4大スポーツの一つであるフットボールの大学チャンピオンを決める一大イベントで、毎週末、プロ顔負けの試合をテレビで見ることができる。収容人数9万人規模を誇るスタジアムでの試合は、まさに圧巻である。残念ながら姉妹校のUCリバーサイド校（UCR）にフットボールチームはないが、ソフトボール、野球、バスケットボール、陸上競技、サッカー、ゴルフなどで学生たちの活躍を目にすることができる。

アメリカの大学スポーツは、ほとんどの場合、全米大学体育協会（NCAA）の傘下にあり、NCAAのルールに基づいて競技会も管理されている。1906年に、当時のアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトの呼びかけにより発足した組織で、若い学生アスリートを重大なけがや搾取的な扱いから守るために創設された。

NCAAのルールは、大学やアスリートのみならず、コーチ、教員、後援者、ファンにも適用される。その中でも特記すべきは「文武両道の徹底」であり、学生の本業である学業を怠らないよう厳格な規定を設けている。このルールに基づきUCRには、学生アスリートのための学習スペースが完備され、現役引退後を見据えたキャリアプログラムも大学教育の一環として用意されている。つまり、スポーツから一線を退いた後の人生設計を大学がきちんと保障しているということだ。

「スポーツしかやってこなかった」という言い訳はアメリカでは通用しない。

山口助教は、今年4月より南カリフォルニア・ロサンゼルス郊外のリバーサイドに滞在し、城西大学、城西国際大学の研修学生の指導・支援を行っています。毎号、現地で聞いた、見た「米国のスポーツ事情」について寄稿します。

スポーツが盛んなリバーサイド校

本塩 遼選手 Interview

種目転向 けが克服からの飛躍

全日本インカレ二百㍍を制覇した本塩（手前）＝月刊陸上競技提供

――今シーズンこれまでの感想は。

本塩 個人では関東インカレでの四百㍍優勝、全日本インカレでの二百㍍優勝と、ともに良い成績で城西大学陸上競技部の歴史に残せたと思う。しかしタイムには納得してなく、その点は心残りだ。来年以降の楽しみとして取っておく。全日本インカレでの四百㍍リレーでは早稲田に続く、城西大学新記録での準優勝ということで、リレーでの初の表彰台には感動した。メンバーの走力に加え、応援に対する「勝ちたいという気持ち」がこの結果に結び付いたと思っている。チーム力を感じた瞬間でもあった。

――今までの陸上競技人生を振り返って。

本塩 総合的に振り返ると、けがして苦しんだ時期がほとんどだった。1年生から3年生まで年々けがの状態は悪化し、大会に出られない時期さえあった。しかし今年に入って専門種目を百㍍・二百㍍から二百㍍・四百㍍に変えることによってけがを克服することができた。また去年の秋から主将になり、部員を引っ張るリーダーとしても、強い選手としてもその役割は大変だったが、結果的に今年の両インカレで城西史上最高の総合得点を収めることに貢献することができた。

――印象に残っているレースは。

本塩 今年の関東インカレの四百㍍で優勝したことだ。これまではけがで出場すらできていなかったため、種目を変更して間もないこの種目でチームの応援を受けながら優勝できたことは大きな出来事だ。自信になり、けがをしていた過去の自分と決別できたレースでもある。

――今後の陸上競技人生についてお聞かせください。

本塩 来年実業団にチーム入りすることが決まっている。今年は標準記録を切れず、オリンピック出場を惜しいところで逃したこともあり、来年の目標は世界選手権に出場することだ。主要種目の二百㍍を中心として、タイムとしても納得する走りをして日の丸を背負いたい。

――読者へのメッセージをお願いします。

本塩 けがで苦しんだ時期が3年間続いたが、諦めずに競技を続けたことが今シーズンの結果に結び付いた。何事も明らかに無理と思わずに、必死に努力することの重要性を伝えたい。また来年以降も実業団として世界大会出場を目指したい。どうぞ応援よろしくお願いします。

【聞き手・寺田登】

男子ソフトボール部

■試合結果

関東学生秋季リーグ

（10月6～8日　東松山市駒形グラウンド）

6日
城西大学　5－2　千葉大学
城西大学　3－3　東海大学

7日
城西大学　4－6　国際武道大学
城西大学　8－1　関東学園大学

8日
城西大学　7－0　高崎経済大学

準硬式野球部

■試合結果

秋季リーグ戦

9月3日
城西大学　12－3　一橋大学
4日
城西大学　0－2　法政大学
7日
城西大学　14－5　千葉大学
11日
城西大学　6－9　帝京大学
14日
城西大学　0－3　筑波大学
10月2日
城西大学　7－11　千葉大学
3日
城西大学　0－10　帝京大学
4日
城西大学　9－1　一橋大学
9日
城西大学　4－2　法政大学

後期 開幕から4連勝

サッカー部

埼玉県リーグに所属する城西大学サッカー部。今シーズンは前期リーグで苦しんだものの、2カ月のインターバルの間に課題解消やトレーニングを強化し、チーム一体となって後期リーグに臨んだ。そして、後期は開幕戦から勝利を飾り勢いに乗って4連勝を決め、10月7日現在4勝1分という好成績だ。順位は前期後期を合わせて出され、8チーム中4位の位置につけている。

チームは、主将の門間拓巳（経営4）を中心に4年生が存在感を発揮してまとまりがあるという。また、関東リーグへの復帰を目標としているが、現実のものとしたいそうだ。

関東リーグへの復帰の可能性は多分にある。多くの応援が復帰への後押しになる。残り2節の2ゲームにおいて全力を尽くしてほしい。

【久村洋介】

「支えるスポーツ」にも焦点を

記者の目

中学・高校と陸上競技部に所属していた影響か、これまでの私にとってスポーツは「するスポーツ」の印象が強かった。日々の練習、大会参加における競技者だけがスポーツの意義だと思っていた。

ところが2年前Jスポ記者になり、以後活動を通し各部の監督や主務と交流を図ることで、いわゆる「支えるスポーツ」の重要性にも注目するようになった。新聞発行を楽しみにしてくれていて、熱心に協力してくれる運動部の関係者は多い。運動部は競技者だけの団体ではないのだ。サポーターが運営を支えることによっても成り立っている。時にはそこに応援の力が加わり、スポーツはより発展する。

私たちJスポ編集部も城西大学運動部の発展に全力で貢献するつもりだ。そういった、運動部に関わる全ての人における「人と人との繋がり」に本来のスポーツの良さがあると思う。

【寺田登】

取材スタッフ

編集長	経営学部4年　原　駿介	経営学部3年　久村　洋介	経営学部3年　萩原　洋輝
副編集長	経営学部4年　寺田　登	経営学部3年　伊藤　香澄	経営学部2年　齊木ひろみ
	経営学部4年　嶺　優紀	経営学部3年　中里　絵美	薬学部2年　斎藤　明彦
	経営学部4年　金子　亮	経営学部3年　大久保匡留	薬学部2年　小峯　大輝
	経営学部4年　江田　悠真	経営学部3年　服部　哲大	経済学部1年　三浦　悟

監修・アドバイザー

副学長　草野　素雄	経営学部助教　山口理恵子	2011年度卒業　千葉　史典
経営学部教授　小野　正人	薬学部准教授　上田　秀雄	2011年度卒業　安富英里香
経営学部准教授　土江　寛裕		

Jスポ フェイスブック はこちら ▶ http://www.facebook.com/JOSAISPORTS